

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 劉娟

【所属】(助成決定時) 横浜国立大学都市イノベーション学府 博士後期課程

【研究題目】 中国における「翻訳絵本」の受容研究

【研究の目的】(400字程度)

2000年までは、中国の児童文学及び児童教育においては、絵本はほとんど注目されていなかった。しかし、2000年以降、福音館書店の元編集長松居直の絵本理論の中国における受容、ポプラ社が2004年北京に設立した中国法人の児童書専門店の「絵本館」の開設、及び同社が推進した普及活動によって「絵本」は浸透するようになっていった。このような背景のもとで、中国では子ども向けの外国絵本の翻訳出版が急成長を遂げ、広く受容されてきた。さらに、翻訳絵本の中国における受容の特徴は、翻訳絵本を教材としてとらえ、特に幼児教育及び小学校低学年の国語教育研究において、絵本を教材として用いた授業実践や教材開発が盛んに展開されたことであることが明確に見えてきた。本研究目的は、中国における日本の翻訳絵本(2000～2018年の間に1500点以上刊行)を中心に、中国の翻訳絵本受容の経緯や児童教育の「教材」としての特徴が生じた背景と要因を明らかにすることである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は以下の三つの段階で行われた。

- 1) 中国の「翻訳絵本」の受容について、教材として使われる特徴が生じた背景と要因について考察した。中国における「子どもの発見」及び「児童文学の誕生」は1920年代中国社会の近代化をめざした「五四運動・新文化運動」が始まりで、そこから誕生した児童文学は、当時から小学校教員育成の師範学校で教材となり、現在でも児童教育、国語教育の人材を養成する教材として使われている。分析対象としての1923年誕生以来約百年間に40冊以上の児童文学の理論書は、日本で入手できないものを、現地の研究補助作業者に手配してもらった。
- 2) 現地調査を行うことができなくなったが、オンラインで①出版・宣伝は出版社及びその関係者へのインタビュー、②翻訳は児童文学研究者へのインタビュー、③幼児教育は幼稚園、絵本館などの教育活動への考察、以上三つの方面からデータ収集をした。
- 3) 調査結果については後述するが、それまで得た資料をもとに、学会・国際会議にて報告を重ね、投稿論文にもまとめた。具体的には、日本現代中国学会大会(2021年10月)、日本語教育と日本学研究国際シンポジウム(2021年11月、「優秀論文発表賞」受賞)、日本読書学会大会(2022年9月)にて報告を行った他、論文としては『言語生活』(39号)、『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』(35号)、『日中翻訳文化教育研究』(7号、「第一回日中翻訳文化教育奨励賞」受賞)、『常盤台人間文化論叢』(8巻1号)にて刊行された。最後に博士論文を完成した。さらに、博士論文は第九回法政大学出版局学術図書刊行助成に採択される運びとなった。

【結論・考察】(400字程度)

本研究では、2000年以降中国において受容が急速に進んだ翻訳絵本に注目し、その受容の経緯や浸透の実態を児童教育との関連を中心に考察した。児童文学理論書、政策法令、様々な統計、翻訳絵本が載録された国語教科書、中国国家図書館の児童書蔵書目録・絵本推薦目録、新聞記事を用いて、児童教育における翻訳絵本の利用の展開と実態を論じてきた。

中国の児童文学の伝統的役割(小学校の国語科の教材とされ、児童文学理論の研究は国語科の教員育成の

過程において発展) というプラットフォームを構築し、中国における翻訳絵本の受容上顕著な特徴である、幼稚園の言語教育や小学校の国語教育における使用について、学習者の資質の向上を図る「素質教育」を推進する 1990 年代以降の教育改革との関連を中心に分析を行った。そして翻訳絵本が急速に受容された大きな理由は、それを教材として取り上げる側が、「素質教育」の要素の一つ「想像力の養成」に貢献できるという「教育的価値」を絵本に見出したためだと結論付けた。